

これまで選挙で棄権したことはない。支持したい候補者がいなくても、なんとか「よりました」人間を探して投票すべきであり、それは市民の義務である。こうした意見は個人的見解というよりも、「やっぱり選挙には行くべきですか」と学生などに質問されることの多い政治家者が使う常套句でもある。そもそも人はなぜ棄権するのか。棄権についてメディアは「いい加減な

時々草々

人間が投票しない」と表現したがる傾向がある。しかし棄権は非常に合理的な行為でもある。投票に意味を見いだせない場合、人々は棄権する。

今回の新潟県知事選挙にはそうした意味が見いだせるだろうか。結果としては泉田氏が三選を果たした。しかし他の候補者を出した共産党とスマ

越智 敏夫 (新潟国際情報大教授)



縛られぬ権力者誕生

イル党には悪いけれど、告示日からその結果はわかりきっていた。共産党以外の5政党が相乗りで泉田氏を支持したのだから当然である。

これでは投票に行けというほうが無理だろう。つまり今回の史上最も低となった投票率の責任はす

べて政党にある。様々な状況から現職を応援するしかなかったと政党はいうだろう。しかしその政党の地方組織を

弱体化させているのは、実はこうした現職への安易な相乗りなのである。県政の問題を発見し、新たな政策を提案することが期待されているのが政

党だが、現実を直視することなく安易な選択をすることによって、政策立案能力を次々に喪失し続けている。

もしかしたら多くの県議、特に自民党県連の幹部たちは「私が泉田氏を知らしている」と、自らの権勢を自慢しているかもしれない。しかしそ

れも大きな勘違いである。すでに彼らは現職知事の再選、三選に利用されるだけの存在になり果しているのだ。

ともかくこの選挙の結果、現職知事にさらに4年間のオールマイティな期間が与えられた。泉田氏が「攻めの姿勢」に出るのも当然だろう。誰も彼を止めることができなからだ。都合12年間、誰からも牽制されることなく1人の権力者が

おち・としお 1961年愛媛県生まれ。立教大学法学部卒。慶応大学大学院政治学博士課程修了。96年、新潟国際情報大学講師。2006年に教授。専門は現代政治理論。

ことなく1人の権力者が県政を自由に支配する。これが新潟政治の現在形である。